

あるむぜお109

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 109

2014年9月20日



車返の方々による「セイノカミ」の再現作業風景

目次

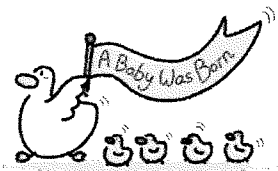
- 1-2 リニューアル速報!
 - ②「セイノカミ」再現
- 3 展示会案内
江戸時代の文化人と府中の遊芸
- 4-5 ノート 都市は代替地?それとも新天地?
- 6 多摩川おさかな考
②ハゼの仲間
- 7 最近の発掘調査
縄文時代中期の河童形土偶
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向
⑥はやぶさからはやぶさ2へ (その2)

リニューアル速報!

来る10月4日に、本館2階常設展示室の「原始・古代」「中世」「近世」「近現代」および「自然」部門がリニューアルオープンします。本シリーズでは、リニューアルの意図や進捗状況などを紹介します。

②「セイノカミ」再現

「変わりゆく府中」コーナーにあける、車返くらまがえし（白しろ糸台いとたい）の「セイノカミ」再現風景。竹と藁わらで組んだ円錐形えんすいの小屋の上に登り、縄の結びを確認し、飾りとなるダルマをすえています。3m以上の高所での作業で、細心の注意がはられました。



リニューアル速報！

②「セイノカミ」再現

府中の代表的な祭りは？と聞かれれば、多くの人は「くらやみ祭」を思い浮かべるでしょう。武蔵府中の象徴でもあるこの祭礼は、2008年常設展示室にリニューアルオープンした「くらやみ祭」コーナーでもおなじみです。

しかし、府中のまつりが、すべてくらやみ祭に象徴されるわけではありません。地区ごとの鎮守祭礼や、家々でまつられている神様仏様にまつわる行事など、多くのまつりが存在し、それらは地域に欠かせない年中行事となっています。大規模な祭礼だけでなく、もっと狭い範囲のまつりを知ることは、各地域の伝統的な文化を知るきっかけになりうるでしょう。そんな意図から、新しい常設展示室では、「家の神様仏様」「村の神様仏様」を紹介することにしました。

常設展示室リニューアル計画が立ち上がった当初から、そこに府中のサイノカミを再現して展示したい、と考えていました。サイノカミ（セイノカミ・どんど焼き）は、毎年1月15日の小正月前に竹や藁、正月飾りを集め、円錐形の小屋を作り、その中で夜を明かした後に燃やすという行事です。そのルーツは、道の神様（道祖神）のまつりだと考えられています。昭和30年代以前は子ども中心の行事として各所で行われていました。治安や風紀上の問題から中断されましたが、昭和50年代に大人たち中心の行事として復活します。

しかしそれも衰退し、現在上記のような形式で行っているのは押立、四谷のみです。サイノカミは大きな小屋を燃やすため、会場として広い土地が必要です。宅地化が進みそれが少なくなったことが原因としてあげられます。

サイノカミの小屋は高さ10m以上、直径8m以上になることもある、とても大きなもので、かなりインパクトがあります。これを展示室に再現できれば、年間数日しか見ることのできない小屋を、通年で見られるようになります。

地元の行事の再現は、地元の協力を得るのが一番です。しかし、作り方や通称は地区によって微妙に異なり、どこをモデルにするかという問題があります。検討した結果、市内では唯一比較的若

い世代である青年会が作業の中心を担っていながら、2012年から諸事情により小屋づくりが休止になり、今後の伝承が心配されていた車返（白糸台）の皆さんに、再現をお願いしました。車返の「セイノカミ」で使用する「ごろ石」と呼ばれる石は、郷土の森博物館の前身、府中市立郷土館の時代の昭和50年（1975）からお預かりしています。そうした縁もあり、車返の皆さんもセイノカミ再現を快く引き受けてくださいました。

まずは材料の確保です。当館の田んぼで栽培したものを中心に約800束の藁を用意しました。これを、約2カ月かけ手作業で汚れを落とし、その後燻蒸（殺虫）しました。さらに、小屋の基礎となる竹や周囲に取り付けるしめ飾り、ダルマやお札をたくさん用意しました。

そして本年7月5日・6日の2日間をかけ、車返の皆さん延べ100人以上の協力を得て、サイノカミは完成しました。展示室の都合上、直径3.5m、高さ約6メートルと、実際につくっていた小屋の規模に比べ、半分程度の大きさです。昭和30年代以前に作っていたものに比べれば立派すぎ、忠実な再現にはなっていないとも言えます。しかし、そうであっても、この展示は府中の暮らしを知るきっかけにはなると思います。これを通じ、府中のまつりや、地域社会の移り変わり、現在の状況に興味を持っていただければ幸いです。

なお、展示には家々のまつりを再現するコーナーもありますので、ご期待ください。

（佐藤智敬）



展示室内に完成したセイノカミ

企画展

江戸時代の文化人と府中の遊芸

10/4 (土) ~ 2015/3/29 (日)

会場：本館 2 階企画展示室

観覧無料

「遊芸」とは、歌舞音曲や生花などの遊びに関する芸能や文芸を総称した言葉です。江戸時代後期には、江戸近郊の多摩地域にも、狂歌や俳諧、插花などさまざまな遊芸が入ってきました。府中市域でも、裕福な人びとの間で流行し、同好の士によるサロンが形成され、遊芸を通じたネットワークが広がっていきました。

これら遊芸を嗜むためには、読み書きの能力は当然のこととして、和歌や漢詩、儒教などの豊かな教養が必要となります。狂歌や俳諧のように洒落や滑稽を詠んだものでも、パロディーのもととなる和歌の知識がなければ、その笑いを理解することはできません。また、插花に関しても、その思想は儒教や陰陽道などに基づいていました。つまり、さまざまな知識を有する文化人でなければ、遊芸を楽しむことは難しかったのです。

府中の文化人として名が知られていたのは、府中宿で四人部屋という旅籠屋を営んでいた野村瓜州です。彼に会うために江戸から訪れる人も多く、若き日の狂歌師・大田南畝もそのひとりでした。

瓜州のもとには、府中をはじめ近隣の文化人たちが集まっていたと思われます。というのは、瓜州の死後の文化 14 年 (1817)、瓜州の隠宅の名を冠した「松蘿園の集会」という会がつくられたからです。この会は、和歌、俳諧、漢詩、絵画などさまざまな遊芸を自由に楽しむ場だとされており、府中における文化サロンの魁だったと考えられます。

この会の参加者に、本宿村小野宮 (現 住吉町) の内藤重喬がいます。重喬は、狂歌を唐衣橘洲に

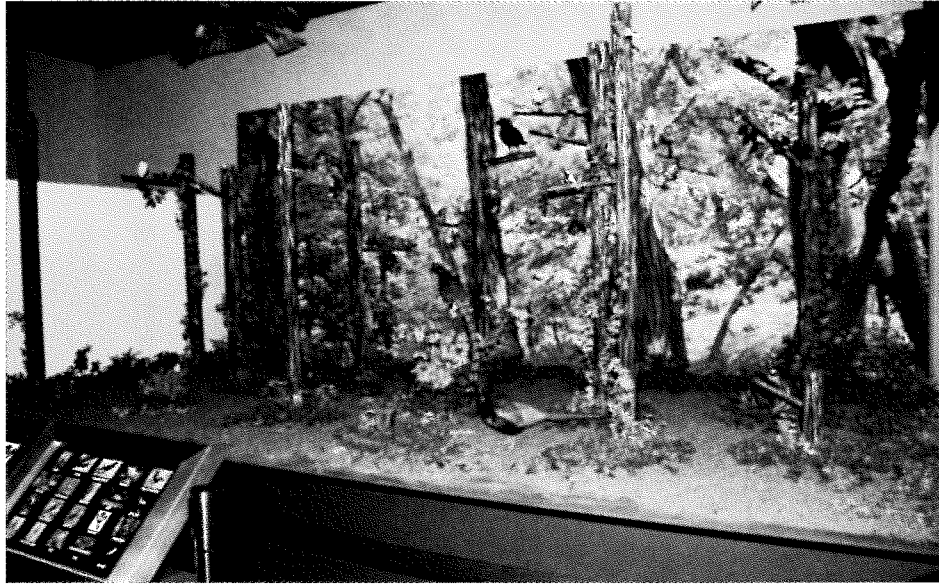


「插花図」のうち「沙羅双樹・川原撫子」

学び、久練堂と号しました。俳諧は加舎白雄の門下で宗匠となり、月並発句会を開催するなど地域の指導者として活躍しています。また、息子の重英は狂歌や俳諧のほかには插花を嗜み、袁中郎流の奥義を授けられました。

重喬は、よく和歌も詠みましたが、彼が参加していた和歌会は、六所宮神主の猿渡盛章を中心とするものです。この猿渡盛章と息子の容盛は、多摩地域における和歌の発展を担った人物で、両名とも縦園と号しました。容盛の指示で編集された和歌集『類題新竹集』には、多摩郡を中心とした 515 名、2,737 首の和歌が掲載されています。

今回の展示では、これら府中の文化人の遊芸における事績を紹介し、その交流を探ることで、江戸時代後期の多摩地域の遊芸の発展と文化人の姿を明らかにしたいと考えています。(花木知子)



常設展示室リニューアルへの試みとして、特別展で造作した雑木林の簡易ジオラマ

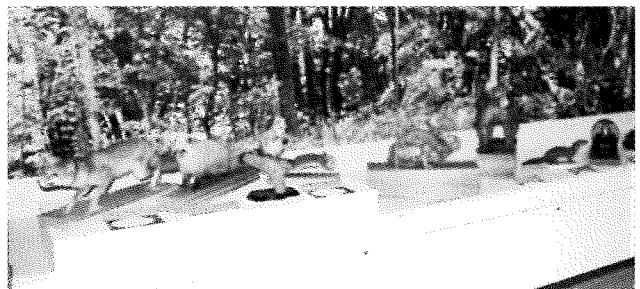
リニューアルオープンする常設展示室では、都市化が進んでも緑の環境を多く残す府中の自然をアピールし、代表的な観察スポットをジオラマで紹介し、この展示内容に繋げるべく、過去2年間の特別展では、市内の浅間山と多摩川をテーマにそれぞれの環境と生物の関わりについて取り上げてきました。新しい常設展示をはじめ、この両特別展に共通で提示したかったことを書き留めておこうと思います。

▼ 2012年「里山どうぶつ探検」展

もはや裏山で薪を切ったり、落ち葉掃きをしたりする生活形態は時代とともに消滅し、里山と呼ばれた雑木林は放置されて本来の機能を失っています。人とうまく共存し、里山生活をしていた動物たちは従来の生息地を追われ、一部は都市化の進む市街地へと移動を始めました。東京の中間部分に位置する府中は、いまだ緑を残す場所が多く、流れて来た動物たちの拠り所になっています。特に浅間山には管理の行き届いた雑木林があり、多くの種類が入り込んでいます。展示では、浅間山のある府中やその周辺に進出しているタヌキ・キツネ・アナグマなどの里山動物を紹介し、意外にも都市環境が従来の生息場所の代替と

なっている実状を考察しました。特に近年目立っているカラスは、本来の森林を基盤とした活動域から完全に都市へとシフトした典型的な鳥です。市街地の街路樹にはキツツキの仲間のコゲラ、花蜜を求めて来るメジロなども普通に見ることが出来ます。森の生物がコンクリート化された場所にも適応していることに加え、そこに良質の緑が豊富に残されていることで、さらに侵入に拍車をかけているのです。

ここにもう一つの問題があります。都市そのものが、本来は自然地であったということです。森や林が開発され、人工建造物に置き換わった場所には、以前に生息していた生物の居場所はありません。人為的に公園や街路樹の緑がレイアウトされた新たな空間には、在来種の帰還ではなく、今



里山動物がズラリと勢ぞろい

まで目にしたことのない他国からの生物が侵入して来るケースが多いのです。里山で生活していた動物が移動するならまだしも、植物も動物も偶然持ち込まれた、あるいは意図的に持ち込んだ外来種がはびこると言うのは皮肉な話です。浅間山は管理の行き届いた都市の緑地であり、典型的な雑木林の生態を作りますが、そこに里山からの転入者、外国からの訪問者が混在する不可思議な自然が構築されているふしがあるのです。

▼ 2013年「多摩川にアユが帰ってきた！」展

多摩川は浅間山と並ぶ、府中を代表する自然環境です。特に府中に沿う中流域は、その昔はアユが豊富に泳ぐ清らかな水質でした。河原の環境は変化に富み、水中に始まり、中州、水際、低水敷、高水敷、堤防など、多様な生物が棲み場所を選択できる条件を揃えています。しかし一方では中流域の特徴である、人との密接な関わりが仇となり、その後の多摩川を運命づけてしまいます。高度成長期に多量に流された生活排水が極度の汚染をもたらし、一時は死の川とも形容されるほどになってしまったのです。アユはもちろん、虫も鳥も減っていきました。

その後は逆に人の力で、汚水処理場を完備させるなどの方策を施した結果、多摩川的环境は迅速に汚染から脱して復活しました。展示ではそんな多摩川的环境変遷を解説しながら、現状復帰した川の自然を構成する生物を紹介しました。特に水槽に泳ぐ魚たちは、思ったよりも豊富な種類が生息していることを認識させてくれました。都市に沿う川にも自然の力は溢れているものだ実感する次第です。

ところがここにも浅間山同様の問題がありました。数並ぶ水槽の中で、コクチバスという魚を展示しましたが、これこそが多摩川にはびこる外来種的一端でした。一時の環境悪化で少なくなった魚を補填する意図だったのか、外来魚が結構多摩川には放されていたようです。在来種を増やすのは自然保護に繋がりますが、単にペットの外来魚を川に放すのは自然破壊の元凶です。北米産のオオクチバス、コクチバス、ブルーギルなど、今多摩川に氾濫する外来種の何と多いことでしょう。在来種が産んだ卵をはじめ稚魚までも駆逐し、種によっては在来種との交雑に及び、遺伝子

の侵略も生じています。一度崩れた環境を復活させても、以前とは全く同じにはならない皮肉な実状です。都市化で生まれた新規の空間が、過去とは別の生物で構成されるのと似ていませんか？両者とも以前の自然を人の手によって再構築した点で、同じ結果を生じさせているのです。また、豊富になった魚が、魚食の野鳥であるカワウを激増させたり、度々の河川工事が冬に渡来するカモ類を減少させたりと、外来種侵入以外でも新たな生態系の変化が多摩川には生じているのです。

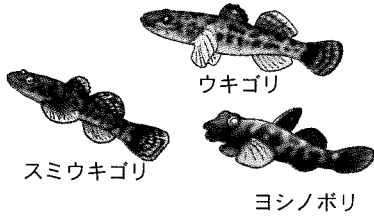


特定外来種の飼育許可を得て展示したコクチバス

▼ 2014年・・・そして新常設展示へ

生まれ変わる常設展示で紹介する府中の代表的自然環境、それは段丘崖の林、浅間山の雑木林、多摩川の特徴的景観、市街地の一コマです。都市にも植物は豊富で、昆虫も野鳥も見られます。崖にも川にも山にも、そして街にも季節を変えて見られる生物は、増減はあっても無になることはありません。昔とは環境の質や人との関わり方も異なりますが、その分新しい生態系として続いていくことを内示しています。

「里山どうぶつ探検」で示した代替地としての都市、「アユが帰って来た！」で示した新天地としての川、これらを介して今一度自分自身が、常設展示の改修に際し、府中の自然を再確認していたような気がします。都市化が進む中で、各所に緑を残す府中の街。その緑は紆余曲折を経て今に至り、そして過去にはなかった生物の居場所として新たな境地を迎えている点で、実に興味深いものといえます。森林、河川、丘陵から、さらに国内外からの流入・侵入、まさに都市の自然は雑多な生き物時代に突入しながら、今後はその中の混沌を収束させるべく調和を図ろうとしましょう。その過程を追いながら新たな発見を得ることが、都市の自然を見守ることではないかと考えています。



②ハゼの仲間

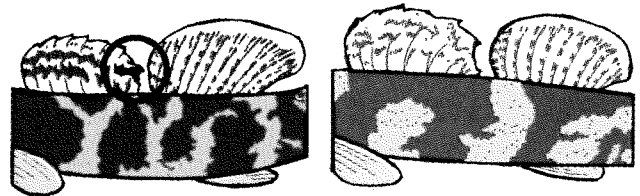
博物館エントランスホールに設置した多摩川魚類の水槽展示は、来館者にもすっかり定着してきたようです。気が付けば子どもを中心に、水槽の中を覗き込んでいる光景を度々目にします。この数種類の多摩川魚類が混在する大型水槽の隣には、もう一つ小型の水槽を置いています。ここでは季節の魚を選抜して期間限定の紹介を試みており、この夏はスミウキゴリというハゼの仲間を展示しました。

人気のある大型水槽にもハゼ科の魚類を飼育していますが、ここにはウキゴリというハゼを入れています。同じハゼ科で多摩川在来種のヨシノボリとよく似ていますが、ウキゴリは上から見ると上半身が丸みを帯びており、ヨシノボリが鋭い形態であるのとは対照的です。頭が縦扁し、ナマズの頭部のような形なので見分けはつくと思います。ウキゴリの仲間は口が大きく、体長は10cmほどに成長します。淡水と海水が混じり合う下流の汽水域から中流域を活動範囲とし、流れの緩い川の淵やワンドなどによく見られます。動物食で、河川では水生昆虫や稚魚・仔魚を好み、湖沼ではエビの仲間や小型のハゼを捕食します。

ゴリとはハゼの仲間を指す名称です。一般的にハゼというと、水底にじっとしている習性が良く知られていますが、中層を泳ぐ仲間もいます。ウキゴリは水に浮くハゼという意味なのです。水中を泳ぐウキゴリタイプの仲間は東アジア固有の種で、日本では全国的に分布するウキゴリを筆頭に、シマウキゴリ・スミウキゴリ・ビリング・ジュズカケハゼ・シンジコハゼ・イサザ・エドハゼの8種類が知られています。この内、多摩川に生息するのは、ウキゴリとスミウキゴリが主で、絶滅が危惧されるジュズカケハゼも稀に見ることがあります。河口近くでは、ビリングなども姿を現すかも知れません。これらとともに、底でじっとしているタイプのヨシノボリやヌマチチブ、マハ

ぜ、カジカと言ったハゼも多摩川のメンバーです。

さて、夏のトピックスとして取り上げたスミウキゴリですが、もとはウキゴリとして分類されていました。両者の形態的差異はほとんどありません。よくよく観察するとわかりますが、ウキゴリの第一背びれに、わずかな黒の斑紋があります。スミウキゴリは無斑です。そしてウキゴリが主に中流域に棲む淡水型なのに対し、スミウキゴリは下流から河口の海近くに棲む汽水型であることも加味し、両者を分類したのでしょう。その下流域に多いスミウキゴリが今年は府中近辺の多摩川で非常に多く見られました。府中辺りでは、中流域に多いウキゴリでさえ、それほど多くはないのですが、どうして河口付近のスミウキゴリが増えたのでしょうか？



ウキゴリ

スミウキゴリ

近年は昔のようにアユが多摩川に帰って来るようになりました。中流と下流域の境目にある大田区の調布堰でカウントされる戻りアユの数は年々増加し、遡上ルートを妨げていた中流域の各堰には魚道も設けられ、アユはかなり上流まで進めるようになりました。今年はさらなるアユの遡上を補助するために調布堰を開放したようで、この流れに乗ってアユとともに河口のハゼも一緒に上がってきたのではないかと考えられています。アユも戻るきれいな水を取り戻した多摩川だからこそ、ハゼのような種類も川の上下を自在に移動してこれるのだと思います。ウキゴリとそっくりなスミウキゴリがこの辺りでたくさん捕れたのも、多摩川の浄化だけでなく、常に川の環境が人為的に変化していることの証しではないでしょうか。スミウキゴリを鑑賞しながら、そんな思いを巡らせました。

縄文時代中期の河童形土偶

若松町一丁目 府中市ふるさと文化財課 中山 真治



河童形土偶の頭部

清水が丘遺跡は、京王線東府中駅南東付近に広がる縄文時代中期を中心とした集落遺跡です。本年2～3月に行われた1654次調査で、土偶の頭部が出土しました。この場所は清水が丘遺跡の縄文時代集落の北東にあたりますが、今回の調査では住居跡などの遺構はみつかっていません。何もないムラの外れのような場所から、土偶の頭部1点だけが発見されました。

出土した土偶は、縄文時代中期前半（約5500年前）のもので、頭部が平らであることから「河童形土偶」と呼ばれています。主に北陸から中部高地地方に分布していますが、南関東では多摩川流域と多摩丘陵近辺を中心に約10例が見付かっています。

この土偶は、やや横長の楕円状の三角形を呈した顔面と、細い目が特徴です。頭部は上面が円形を呈していて、前頭部から後頭部にかけて、頭部を左右に2分するように引かれた沈線文と、等間隔に開けられた3か所の小穴があります。この小穴には、装飾用の鳥の羽などをさしたという説もあります。

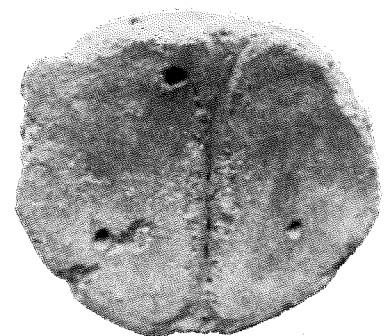
土偶はの用途を巡っては以下のような諸説があります。

- ①幼児の玩具という説。
- ②装飾品、護神牌といったお守りを兼ねた信仰の用具という説。
- ③故意に壊されているものが多いため、悪疫の回避やけがの快癒祈願などの身代り像か、祓いの人形という説。
- ④大地の豊穰、農耕の恵みを司る女神という説。さらに子孫繁栄や出産に関わる子どもと母体の安泰を祈るための偶像とする説。
- ⑤霊力や精霊が降臨する人形という説。

しかし、いずれもが決定的ではありません。

なお、土偶は縄文時代の全時期を通じてみられるわけではなく、中期でも関東地方北部など全く作られなかった地域もあります。

これまでに、府中市内で発掘された土偶の数は、本宿町遺跡で中期前半のものが約30点、清水が丘遺跡と武蔵台東遺跡で中期後半のもの合わせて約15点があるので、都合50点近く出土していることとなります。

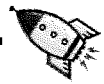


河童形土偶の頭頂部



連載

天文・宇宙の最新動向



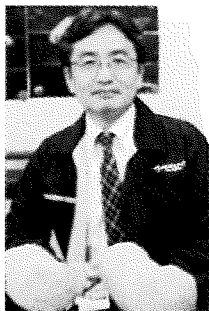
⑥はやぶさからはやぶさ2へ (その2)

インタビュー：本間隆幸

今回は、はやぶさがイトカワに到着するところまでを紹介しました。今回は、到着から帰還までを、引き続きミッションマネージャーの吉川真さんにお伺いします。

Q. サンプルリターンはどうでしたか？

2005年11月にタッチダウンの準備、接近しては離れるという練習を3回行いました。小さな天体の周りでの探査機の運用というのは世界で初めてですから最初はうまくいかず、コンピュータのプログラムを書き換えて対応しました。



練習中に小型着陸機を降ろしましたが、イトカワ表面に落とせませんでした。

本番1回目のタッチダウンは最初は順調で、ターゲットマーカースも予定通り表面に落ちました。しかし、表面に触れるとすぐに上昇すべきところ離れず、下に潜って行くようにみえました。何が起きたのか分からなかったのですが、おかしいので、プロジェクトマネージャーの川口先生の判断で、一気に離脱させました。後になってはやぶさのデータから、イトカワ表面にしばらく着陸していたことがわかりました。地面に潜っていくように見えたのは、目標地点と実際の着地点がずれていたための錯覚でした。

2回目は一部のセンサーを使わず着陸することで、ほぼ予定通りにタッチダウンできました。しかし、サンプルを採取する装置が表面に触った瞬間に、打ち出されるはずの弾丸が出ていなかったことが後になってわかり、サンプルが取れている可能性は少ないだろうと、みんながっかりしました。

その後、上空でホバリングして留まっているはずのはやぶさの位置がどんどんずれていきました。燃料漏れです。燃料漏れはどんどんひどくなり、はやぶさの姿勢制御ができなくなり、ついには通信が途絶えました。

しかし幸いなことに、はやぶさの軌道は通信が途絶える前のデータで計算できました。川口先生は1年以内に6～7割の確率で通信が復活すると予測されたので、長野県の臼田宇宙空間観測所のアンテナを向けて電波を送り続けました。その結果、7週間後に通信が回復しました。

Q. その後はどうなったのですか。

微弱な電波を頼りに、どうにかはやぶさの情報を得て、姿勢の立て直しを行い、運用を再開しました。調べてみると、燃料漏れで姿勢制御用化学エンジンは使えませんが、イオンエンジンと1台の姿勢制御用リアクションホイールが使えることがわかりました。姿勢制御方法を検討し、1個のリアクションホイールと、イオンエンジン用のキセノンガス、および太陽の光の圧力をうまく利用して、はやぶさの姿勢制御に成功しました。

出発する前に、イトカワの粒子が入った可能性のあるカプセルの蓋を閉める必要がありましたが、全部放電している上に一部壊れていました。無理やり充電すると危険なので、半年以上かけてゆっくり行い、カプセルの蓋を閉めることができました。

Q. いよいよ帰還ですね。

帰還は3年延期し、2010年地球着に変更しました。イオンエンジンは順調でしたが、地球に戻る半年前にすべて故障してしまいました。しかし、イオンを出す部分が生きているエンジンと、電子を出す部分が生きているものをうまくつないで、1台分として使うことに成功し、地球を目指しました。

地球に帰還する直前にははやぶさからカプセルを切り離し、オーストラリアに落下させました。そして回収されたカプセルからは、みごとイトカワで採取した微粒子が発見されたのです。

吉川 真 Yoshikawa Makoto JAXA 准教授

略歴：1989年東京大学大学院修士博士 現・情報通信研究機構を経て1998年より現職 太陽系天体や人工天体の軌道が研究対象

※あるむせお イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意